

全日本実業団が 10 倍面白くなるコラム④

リオ五輪代表たちの帰国後第一戦 その 2

女子マラソン伊藤が長居から再スタート

“五輪代表 vs.代表以外”にも注目

コラム③では、リオ五輪代表が複数出場する種目（五輪代表同士の対決が盛り上がる種目）を紹介したが、代表 1 人が出場する種目にもしっかりと注目したい。その選手のリオでの奮闘を思い浮かべることができるし、種目によっては代表以外の選手もレベルが高く、五輪代表との対決が白熱するケースもある。

社会的にはこの時期、メダリストや入賞者がスポットライトを浴びるが、リオでは世界の壁に跳ね返された選手もいれば、故障の影響でベストパフォーマンスができなかった選手もいる。現実として好結果を残せなかった選手の方が多い。

全日本実業団はそうした選手たちが、“次”に向けての第一歩を踏み出す大会でもある。そこも認識した上で観戦すると、陸上競技をより深く味わうことができるはずだ。

#### ●リオ五輪直前にアクシデントがあった伊藤と福島

短距離の福島千里（北海道ハイテク AC）とマラソンの伊藤舞（大塚製薬）は、種目は違うがリオ五輪ではともに期待が大きかった 2 人である。

伊藤は昨年の北京世界陸上 7 位入賞者で、目標を「メダル争いに加わりたい」と設定していた。1 年前に代表に内定した利点を生かし、余裕を持って準備を進めてきた。福島は昨年の北京世界陸上 100m は準決勝に進出し、今季も 200m で日本新（22 秒 88）と絶好調だった。過去 2 回の五輪は納得できる結果を残せなかったが、「3 度目の正直という言葉もあります」と、福島らしい言葉で意欲を示していた。



だが、2 人とも五輪直前に脚に痛み、違和感が出てしまった。福島は 100m を欠場して日程的に遅い 200m に絞ったが、無念の予選落ち（23 秒 21 は、国外日本人最高記録ではあった）。伊藤は痛みが出てから 2 週間で、スタートラインに立つところまで持って行ったが、10km 手前で先頭集団から離れ 46 位（2 時間 37 分 37 秒）に終わった。

福島 28 歳、伊藤 32 歳。“次”が注目される年齢でもある。

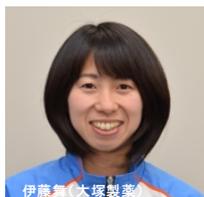
福島本人は「シーズン後に考えて決めたい」と結論を急がない。全日本実業団、10 月の国体を走りながら、自分が何を感じていくかを見ていくのだろう。決めていっているのは「全日本実業団で良い走りをする事」。得意のスタートダッシュで、一歩目からリードを奪う走りを見せてくれるのではないか（※福島についてはコラムの別の回で詳しく紹介する予定）。

伊藤はリオ五輪後も競技を続けると、以前から決めていた。「走れるのなら、ずっと走

り続けたいと考えるタイプ」(大塚製薬・河野匡監督) だという。マラソンの次戦はこれから決めていくが、5000mにエントリーした全日本実業団を、「リスタートの大会と位置づけ、そこから10月の実業団駅伝予選会に向けて体を作っていく」(河野監督) という。

5000mでは優勝争いは難しいかもしれないが、伊藤らしい粘りの走りを見せてくれるだろう。

### ●長距離勢はリオとは異なる種目に出場



伊藤が5000mに出場するように、長距離種目代表の大半が、リオ五輪とは違う種目にエントリーしてきた。村山紘太(旭化成)はリオでは10000mと5000mに出場したが、全日本実業団は1500mを選んだ。設楽悠太(Honda)はリオ五輪は10000mだったが、全日本実業団は5000mである。

村山は昨年も、北京世界陸上翌月の今大会で1500mを走っている。ジュニア世界記録を持つR・ケモイ(コモリコーポレーション)を相手に先頭を走り、3分43秒08で日本人トップの3位。学生時代は1500mでスピードを研いて5000m、さらには駅伝に結びつけてきた。1500mでスピードを確認するのは、村山にとっては通常のパターンだ。

設楽はこの冬の初マラソンも視野に入れているが、その前に実業団駅伝がある。伊藤と同じように心理的負担が軽い専門外の種目で再スタートし、駅伝、マラソンとステップを踏んでいく。

長距離代表たちの意図を理解して観戦することで、先頭争いに加わってなくても、その選手らしさ、今後への意気込みを走りから感じるができるだろう。

### ●五輪代表以外の選手の頑張りが重要

男子110mHは、リオ五輪代表の矢澤航(デサントTC)と日本選手権2位の増野元太(モンテローザ)、7月に13秒52の日本歴代4位をマークした大室秀樹(大塚製薬)の3者の争いか。

矢澤は6月に13秒47の日本歴代3位をマークし、リオ五輪標準記録を突破。だが大室も、13秒52を出したときに「秋には13秒4台はもちろん、日本記録(13秒39)を狙えるレベルに持って行きたい」と意欲を見せた。増野も2年前のアジア大会は4位と力を発揮した。110mHは“五輪代表 vs. 代表以外”の争いが間違いなく盛り上がる。

男子400mには4×400mR代表だった田村朋也(住友電工)、三段跳には長谷川大悟(日立ICT)、女子400mHには久保倉里美(新潟アルビレックスRC)、10000mWには岡田久美子(ビックカメラ)と、リオ五輪代表が1人ずつエントリーしている。

女子競歩は昨年から、岡田が一步抜け出している状況だが、今大会で注目されるのは、ロンドン五輪代表だった瀧瀬真寿



岡田久美子(ビックカメラ)

美（大塚製薬）である。20kmWの日本記録保持者でもある瀧瀬が故障による不調を克服できていれば、女子競歩が以前のように、国内でも競り合う時代に戻る。

女子 400 mHは 34 歳の久保倉が頑張っているうちに、他の選手たちが追いつきたい。この種目では、過去も含めて日本の五輪選手は久保倉 1 人しかいない。08 年北京五輪、12 年ロンドン五輪と連続で準決勝まで進み、国際大会での勝負強さを見せてくれた。リオ五輪は予選落ちだったが、3 回連続出場を果たした。

「リオでは自分の力を発揮できずに悔しい思いをしました。全日本実業団は自分らしいレースをして、しっかりと優勝したい」と久保倉。今回出場すれば、全日本実業団通算 10 回出場者表彰も受ける。専門の 400 mHと 400 mだけでなく、200 mや 100 m、4×100 mRにも積極的に出場してきた。

「印象に残っているのは徳島の大会です（2011 年＝55 秒 90 の大会新）。新しいレースパターンを試して優勝することができました」

この積極的な姿勢が、代表レベルを長年続けられている一因だろう。

日本選手権 2 位の吉良愛美（アットホーム）や、日本歴代 3 位を持つ青木沙弥佳（東邦銀行）、昨年の日本インカレ・ハードル 2 種目 V の藤原未来（住友電工）らが、久保倉を倒そうと頑張れば女子 400 mHが活性化する。

リオ五輪代表に、他の選手たちが真っ向勝負を挑むことでレベルが向上する。そんな種目が 1 つでも増える全日本実業団としたい。